

ブラジル日系・奥地農村地域における言語シフト —アリアンサ移住地における言語使用の世代的推移—

中 東 靖 恵

1. はじめに

1908 (明治 41) 年 6 月 18 日、日本移民 790 名余りを載せ神戸港を出帆した笠戸丸がサントス港に入港した。これが以後約 70 年間に及ぶブラジル移住の幕開けである。第二次世界大戦前には約 19 万人の移住者が入国、戦後は 1952 年の国交正常化以後、戦後移住が開始され、1990 年代初頭までの間に約 5 万人がブラジルに渡っている。戦前戦後のブラジル移住者数の累計は約 24 万人であり、この数はラテン・アメリカ諸国に移住した日本人総数の約 80% を占める (山田編 1986)。だが、移住全盛期を過ぎた 1960 年代後半以降、移住者の数は年々減りつづけ、1982 年以降は 100 人台を割り込み、実質上、移住の時代は終焉を迎えた (森 2003a)。

2001 年度現在、ブラジル日系総人口は推計約 140 万人 (サンパウロ人文科学研究所編 2002)、世界最大の日系人社会を形成する⁽¹⁾。だが、1980 年代後半以降の「デカセギ (dekassegui)」⁽²⁾ 現象により在日ブラジル人が激増、現在約 28 万人が日本で暮らす⁽³⁾。一方、ブラジル日系社会では日系人口が激減、少子・高齢化が著しく、「年長者の介護」や「若い世代の日系コミュニティに対する関心の低さ」など新たな問題に直面している (キクムラ=ヤノ編 2002: 165)。

移住開始から約 1 世紀の月日が流れ、日本語を母語とする 1 世は減少、2 世の高齢化も進み、いまや 3 世、4 世、5 世の時代を迎えた日系社会では、すでに日系 6 世も誕生している⁽⁴⁾。これからの日系社会の担い手であるこれら若い世代はポルトガル語中心の言語生活を営んでおり、急速にポルトガル語への言語シフトの進む日系社会において、日本語の維持は難しくなっている。

2. 研究の目的

ブラジル日系社会における日本語の衰退についてはこれまでも多くの記述があり (野元 1969、半田 1980、馬瀬 1986 など)⁽⁵⁾、一様に、世代が下がるにつれ、日本語は衰退しポルトガル語の影響が大きくなることが指摘されている (本堂 1983、Kanazawa & Loveday 1988、永田 1991 など)。だが、その具体像については未だ明らかになっておらず、日本語とポルトガル語との言語接触、あるいは移民の持ち込んだ各地方言同士の接触により、移民社会における日本語とポルトガル語にどのような言語変容が見られ、コミュニティ内においてどのような言語生活が営まれているのかといった言語運用の実態調査や体系的記述、そして、そのような言語変容を生み出す要因についての具体的考察・分析もほとんど行われていないのが実情である。

本稿では、日伯国際共同研究プロジェクトの一環として 2002 年～ 2003 年にかけて行われた

「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」(付記参照)で行った言語生活調査の結果から、調査地点の一つであるアリアンサ移住地におけるドメイン別言語使用について世代的推移を中心に分析し、ブラジル日系社会における言語シフトの一側面を明らかにしたい。

3. 調査の概要

本稿で報告する言語生活調査の立案にあたっては、サンパウロ人文科学研究所により 2000 年～2001 年にかけて行われた「日系社会実態調査」⁽⁶⁾ が基礎となっている。この日系社会実態調査で調査対象となった 4 地点のうち、奥地農村のサンパウロ州ミランドポリス市アリアンサ移住地と、近郊農村のサンパウロ州スザノ市福博村の 2 地点で言語生活調査を実施した。

このうち、本稿では紙幅の都合上、アリアンサ移住地の結果のみを報告することとし、スザノ市福博村の結果については別稿に譲る。また、調査計画・実施の詳細と調査データについては既刊研究報告書(工藤編著 2003, 2004)に譲り、ここでは概要について述べるに留める。

3.1 調査地点の概要

アリアンサ移住地(Colônia Aliança)は、1924年、サンパウロ市から北西に約600km離れたサンパウロ州西端にあるミランドポリス市(Mirandópolis)に建設された大規模な永住型日系移住地である。第一アリアンサ(信濃村)、第二アリアンサ(鳥取村)、第三アリアンサ(富山村)の3つの移住地からなり、現在、約180世帯、640人あまりの日系人が暮らす。

初期の主要農産物はコーヒー・米・雑穀であり、1930年代後半～40年代にかけて綿作、養蚕が盛んに行われたが、現在は果樹、蔬菜類の生産、牧畜業が中心である。各移住地には文化協会があり、入植祭や慰霊祭、運動会など各種行事を行い、移住地の社会運営の中心的役割を果たしている。移住地創設期から日本語学校が存在し、資金援助や教師派遣など“母県”からの支援を受けている点で特徴的である。また、俳句や短歌など「日系文芸発祥の地」としても有名である。

なお、第一アリアンサ移住地内には、1935年、弓場勇をリーダーとするアリアンサの青年らにより建設された「弓場農場(Comunidade Yuba)」⁽⁷⁾という特異な日系共同農場がある。農場内には約80人が共同生活をしており、生活言語は基本的に日本語である。

3.2 インフォーマントの選定

言語生活調査は標本(サンプル)調査によって行った。サンプリングの基準として採用したのは、年齢と世代である。表1にアリアンサ移住地における15歳以上世代別人口構成を示す⁽⁸⁾。2世が最も多く、2世と3世以降を合わせると全体の約8割を占めることが分かる。なお、ここで採用している世代算定方法は「日本政府方式」⁽⁹⁾であり、3世以降には、3世・4世と混血が含まれる。

表1: 15歳以上世代別人口構成

	人	%
1世	103	17.7
2世	299	51.4
3世以降	170	29.2
非日系	10	1.7
その他・無回答	—	—
合計	582	100.0

このうち、非日系を除いた「1世」「2世」「3世以降」という3つのサブグループを世代サン

プリングの母集団とした。そして、“包括的・全体的把握”と“言語の保存・記録”の観点から、各世代40人を目安に等間隔抽出を行った。その結果、1世：45人(43.7%)、2世：46人(15.3%)、3世以降：49人(21.3%)で、合計140人(22.1%)が抽出された(括弧内、世代別総人口比率)。

3.3 調査の方法と調査項目

言語生活調査は、調査票を用いた半構造化インタビューにより行った。

調査項目は大きく、(1)社会的属性、(2)言語を中心とした生活史、(3)地域、職場、家庭などドメイン別の言語使用、(4)日本語・ポルトガル語の4技能別能力意識、(5)訪日経験と言語意識、(6)日本語教育意識とポルトガル語教育意識、(7)日本語とポルトガル語を混ぜて使用することに対する意識、に分かれており、各項目について細かな質問項目が設定されている。

3.4 調査の実施

調査は、2003年4月下旬から5月初めにかけて約1週間の期間に実施された。当初サンプリングを行った140人のうち、死亡、病気療養中、転出、デカセギ、調査期間中の不在などの事由により、38人が調査不能であり、それは3世に多く見られた。そこで調査期間中に新たに調査対象者を抽出し、追加調査を実施した。最終的にはインフォーマントは110人となった。

4. 調査の結果

以下では、インフォーマントの属性として、基礎的情報(性別、年齢、国籍、出身地)のほか、社会経済的側面(配偶者の世代、学歴、職業)、文化的側面(宗教)、日本との関係性(訪日・デカセギ経験、親戚付き合い)についての概略を世代別に述べた後、「家庭」「メディア・娯楽」「地域社会・職場」の各ドメインにおける言語使用の実態を、世代的推移に焦点を当てて分析する。

4.1 インフォーマントの属性

4.1.1 性別

全体では男性：61名(55.5%)、女性：49人(44.5%)である。世代別に見ると、1世：男24人、女17人(計41人)、2世：男21人、女20人(計41人)、3世：男16人、女12人(計28人)となり、男女比は各世代ほぼ半々であるが、若干男性が多い。

4.1.2 年齢

世代・年齢別構成人数を示すと表2のようになる。1世では70～80歳代、2世では50～60歳代、3世では30歳代が多い。各世代の平均年齢は、1世：75.0歳($SD = 12.57$)、2世：54.5歳($SD = 12.92$)、3世：33.2歳($SD = 6.71$)となる。また、インフォーマントの生年は、

表2：世代・年齢別インフォーマント人数(人)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
1世	—	—	1	1	3	6	13	15	2	41
2世	—	2	5	5	11	14	4	—	—	41
3世	—	8	15	5	—	—	—	—	—	28
合計	0	10	21	11	14	20	17	15	2	110

1世：1904年～1968年生、2世：1929年～1979年生、3世：1954年～1982年生で、1世では

戦前生まれが大半を占め、2世では戦前・戦後生まれが半々、3世では全員が戦後生まれである。

なお、1世には渡航年とその時の年齢も尋ねたが、41人中、戦前移民は27人で、渡航年は1928年～1940年（1920年代：7人、1930年代：18人、1940年代：2人）、戦後移民は13人で、渡航年は1953年～1998年（1950年代：7人、1960年代：3人、1970年代：2人、1990年代：1人）である（無回答1人）。戦前移民の移住年齢は1歳～24歳で、このうち15歳以上が7人（いずれも1915年以前生まれ）、14歳以下が20人（1919年～1935年生まれ）であり、戦後移民の移住年齢は14歳～30歳だが、その大半が20歳代である。つまり、1世は年齢順に、大きく、「戦前成人移民」「戦前子供移民」「戦後成人移民」の3つのサブグループに分類される。

4.1.3 国籍

1世では、日本国籍：33人、帰化：7人（無回答1人）、2世では、ブラジル国籍：33人、二重国籍6人（無回答2人）、3世では28人全員がブラジル国籍であった。

4.1.4 出生地

1世については出身都道府県名を尋ねた。地方別に示すと、北海道：6人、東北：5人、中部：15人、関東：5人、近畿：2人、中国：2人、四国：1人、九州：3人（外国：2人）で、中部地方出身者が比較的多い⁽¹⁹⁾。2世以降については、出身の州・郡/市・植民地名を尋ねた。2世は全員サンパウロ州出身で、そのうちアリアンサ出身者は26人、3世では、サンパウロ州外出身者1人と無回答2人を除く25人のうち、アリアンサ出身者は16人であった。

4.1.5 配偶者の世代

未婚者を除くインフォーマントには配偶者の世代を尋ねた。表3を見られたい。どの世代においても同世代間の結婚が多いが、1世⇔2世⇔3世という異世代間結婚も見られる。だが、2世代を越える1世⇔3世間の結婚はほとんどない。また、2世以降では、1世には見られない非日系人との異民族間結婚も見られる⁽²⁰⁾。

表3：世代別配偶者世代と人数(人)

	配偶者の世代						
	1世	2世	3世	非日系	NR (未婚)	合計	
1世	25	14	1	—	—	1	41
2世	2	28	3	2	1	5	41
3世	—	9	12	1	—	6	28
合計	27	51	16	3	1	12	110

NR=無回答

4.1.6 職業

1世では、41人中22人が職業従事者で、中でも農業従事者が17人と多い。その他、14人が退職者、5人が主婦である。2世では41人中、職業従事者は32人で1人を除いて全員が農業従事者である。その他、主婦8人、退職者1人である。3世では、28人中、職業従事者は18人で、このうち16人が農業従事者である。その他、主婦8人、退職者1人、無職1人である。

4.1.7 学歴

学歴については、日本とブラジルのそれぞれについて尋ねた。1世の場合、日本とブラジルの両方に通学経験のある者がいるが、2世・3世では見られなかった。表4には1世についてのみ、学歴別人数を示した。日本・ブラジルともに小学校程度の者が全体の半数以上を占めることが分かる。なお、高等学校・大学進学者10名のうち8名は戦後移民である。2世では、通学歴なし：0人、小学校：22人、中学校：4人、高等学校：7人、大学：7人（無回答1人）で、小学校程度

が最も多く約半数であるが、高学歴者も1世に比して多い。3世では高学歴化がさらに進み、通学歴なし・小学校：0人、中学校：6人、高等学校：4人、大学：17人（無回答1人）と、全体の6割が大学進学者である。

学歴については、学校教育のほか、日本語学校通学歴と、1世には成人後のポルトガル語学習の有無を、2世・3世には成人後の日本語学習の有無について尋ねた。日本語学校の通学歴が「ある」と答えたのは、1世：14人（34.1%）、2世：24人（58.5%）、3世：24人（85.7%）となり、世代が下がるにつれて通学歴の割合が上がる。なお、1世では、戦後・成人移民の1人を除いた13人は戦前・子供移民である。成人後、ポルトガル語を「学習した」と答えた1世は10人（24.4%）、成人後、日本語を「学習した」と答えた2世は17人（41.5%）、3世は7人（25.0%）である。

表4：1世の学歴別人数（人）

		ブラジルの学校			
		通学歴なし	小学校	NR	合計
日本の学校	通学歴なし	—	6	1	7
	小学校	13	4	—	17
	中学校	5	—	1	6
	高等学校	5	1	—	6
	大学	4	—	—	4
	NR	1	—	—	1
合計		28	11	2	41

NR=無回答

4.1.8 宗教

宗教帰属については表5の通りである（複数回答あり）。1世では「仏教」が半数以上で、「プロテスタント」もやや多いが、2世、3世では「仏教」「プロテスタント」は減り、ブラジルでも信者の多い宗派である「カトリック」が優勢となる⁽⁴²⁾。

表5：宗教帰属別人数（人）

	仏教	カトリック	プロテスタント	日系新宗教	その他	なし	合計
1世	22	3	12	1	0	4	42
2世	11	16	8	0	1	7	43
3世	6	14	1	2	3	4	30
合計	39	33	21	3	4	15	115

4.1.9 訪日・デカセギ経験と親戚付き合い

訪日経験が「ある」と答えたのは、1世：27人（65.9%）、2世：16人（39.0%）、3世：9人（32.1%）で、1世に比して2世・3世では訪日経験者は少ない。訪日目的は、1世で「親戚訪問」や「観光」が多く、「デカセギ」はわずか1人であるのに対し、2世では「親戚訪問」「観光」は1世と比べて少なくなり、「デカセギ」が5人となる。3世では訪日経験者9人中7人が「デカセギ」目的である。また、2世・3世では仕事・デカセギによる日本在住経験者も1世に比して多くなる。

デカセギ以外で日本の親戚と付き合いがあるかどうか尋ねたところ、親戚付き合いが「ある」と答えたのは1世：28人（68.3%）、2世：13人（31.7%）、3世：8人（28.6%）であり、世代が下がるにつれ、訪日経験が減少し、それとともに親戚付き合いも少なくなる現状が窺える。

4.2 家庭における言語使用

家庭での言語使用については、次の3つの質問項目を設定し、選択肢（日本語のみ・日本語のほうが多い・日本語とポルトガル語が半々・ポルトガル語のほうが多い・ポルトガル語のみ）の中から選んでもらった。

(1) 夕食の席など家族全員が揃う時に使用する言語

(2) 家族に話しかける時に使用する言語

(3) 家族に話しかけられる時に使用される言語

(2) (3) については、家族として、「祖父／祖母」「父／母」「夫／妻」「子供」「孫」「兄弟姉妹」「婿／嫁」を挙げ、同居している家族について回答を求めた。

4.2.1 家族全員が揃う時の言語使用

まず、家族全員が揃う時の言語使用の結果を示す。表6は、5つの選択肢のうち、「日本語のみ」と「日本語のほうが多い」、「ポルトガル語のみ」と「ポルトガル語のほうが多い」の回答数を合算し、世代別にクロス集計したものである。

表6：家族が揃う時の言語使用(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	27	8	5	1	41
2世	17	10	14	0	41
3世	5	7	16	0	28
合計	49	25	35	1	110

表6より、日本語使用が優勢な1世から、2世・3世と世代が下がるにつれ、ポルトガル語使用が優勢になっていくことが分かる。各言語使用の割合が世代によって異なるのかどうか

NR=無回答

についてカイ2乗検定を行ったところ、有意差が認められた ($\chi^2(4) = 19.755, p < .01$)。

4.2.2 家族に対して話しかける・家族から話しかけられる際の言語使用

家族に対して話しかける、あるいは家族から話しかけられる際の言語使用については、同居家族に限定したため、回答数にばらつきがある。そこで、比較的回答数の多い夫婦間と子供との言語使用のみ表に示した。

表7：夫婦間言語使用(話しかける時)(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	25	2	0	14	41
2世	13	9	13	6	41
3世	0	3	19	6	28
合計	38	14	32	26	110

NR=無回答

表8：夫婦間言語使用(話しかけられる時)(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	25	1	1	14	41
2世	13	8	13	7	41
3世	1	3	18	6	28
合計	39	12	32	27	110

NR=無回答

表9：子供との言語使用(話しかける時)(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	27	1	2	11	41
2世	9	7	13	12	41
3世	2	3	16	7	28
合計	38	11	31	30	110

NR=無回答

表10：子供との言語使用(話しかけられる時)(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	25	1	3	12	41
2世	5	3	21	12	41
3世	2	2	16	8	28
合計	32	6	40	32	110

NR=無回答

まず、夫婦間の言語使用(表7、8参照。算出方法は表6と同じ)では、話しかける場合も話しかけられる場合も、日本語の優勢な1世から、日本語とポルトガル語併用の2世、ポルトガル語優勢の3世へという世代的推移を見せる。なお、1世・2世では、配偶者が自分より下の世代である場合には若干ポルトガル語の使用が増える。

子供との言語使用(表9、10参照)では、全体的には夫婦間の場合とほぼ同様な傾向を見せるが、子供という自分より下の世代との言語使用であるため、2世ではポルトガル語の使用が多くなり、子供から話しかけられる場合にはその傾向は一層顕著となる。

なお、子供より下の世代である孫との言語使用においてはさらにポルトガル語の使用が増え、1

世では孫に日本語で話しかけるが、孫から話しかけられる場合には日本語とポルトガル語が半々、2世では孫に日本語・ポルトガル語で話しかけ、孫から話しかけられる言語はもっぱらポルトガル語である。これとは逆に、自分より上の世代である祖父母・父母との言語使用では、2世では話しかける場合も話しかけられる場合も日本語を使用するが、3世では祖父母・父母に日本語で話しかけられても、自分からはポルトガル語で話しかける場合が多い。

以上をまとめると、家庭内における言語使用において、1世では日本語、3世はポルトガル語を主として用いるが、両者を併用する2世では自分より下の世代にはポルトガル語、上の世代には日本語をより多く用いる傾向があると言える⁽¹³⁾。

4.3 メディア・娯楽における言語使用

メディア・娯楽における言語使用については、以下の質問項目を設定した。

- | | | |
|------------------------|---------------------|-----------|
| (1) 新聞・雑誌の定期購読 | (2) NHK 海外放送の受信 | |
| (3) NHK 海外放送の視聴 | (4) 日本のビデオの視聴 | |
| (5) ブラジルのテレビ番組の視聴 | (6) ブラジルの日系テレビ番組の視聴 | |
| (7) NHK 短波ラジオ・日系ラジオの聴取 | (8) 日本語の新聞の購読 | |
| (9) ポルトガル語の新聞の購読 | (10) 日本の歌の聴取 | (11) カラオケ |

4.3.1 新聞・雑誌の定期購読

(1) 新聞・雑誌の定期購読については、定期購読の有無と購読新聞・雑誌の言語について尋ねた。定期購読者の結果を表 11、12 に示す。定期購読者があまり多くはないものの、1世では新聞・雑誌ともに日本語で書かれたものを定期購読している場合がほとんどであるが、2世、3世と世代が下がるにつれ、ポルトガル語によるものが増えていく傾向が見てとれる。

表 11：定期購読新聞の使用言語（人）

	使用言語			購読あり	合計
	日本語	日・ポ語	ポ語		
1世	13	12	2	0	27
2世	5	8	10	0	23
3世	2	2	8	0	12
合計	20	22	20	0	62

NR=無回答

表 12：定期購読雑誌の使用言語（人）

	使用言語			購読あり	合計
	日本語	日・ポ語	ポ語		
1世	16	2	0	0	18
2世	3	0	6	0	9
3世	0	1	8	1	10
合計	19	3	14	1	37

NR=無回答

4.3.2 NHK 海外放送の受信

(2) 自宅でのNHK 海外放送の受信について尋ねた結果を世代別に見ると、1世では「受信できる」28人(68.3%)、「受信できない」12人(29.3%)、無回答1人であるのに対し、2世では「受信できる」11人(26.8%)、「受信できない」30人(73.2%)、3世では「受信できる」6人(21.4%)、「受信できない」21人(75.0%)、無回答1人となり、1世と2世・3世とで大きな開きがある。NHK 海外放送受信の有無の割合が世代によって異なるかどうかについてカイ2乗検定を行った結果、有意差が認められた($\chi^2(2) = 21.125, p < .01$)。

4.3.3 メディアの視聴・購読頻度

(3) ~ (11) については、選択肢（よくする・ときどきする・ほとんどしない・まったくしない・そのものがない）の中から選んでもらった。紙幅の都合上、ここでは数値の詳細は省略するが、メディアの視聴・購読の頻度に世代差が見られるかどうかクラスカル・ウォリス検定を行った結果を項目ごとに述べる。

(3) NHK 海外放送の視聴については、前述の通り、受信の有無という点では世代差が認められたが、視聴の頻度では有意差はなかった ($\chi^2(2) = 1.175$, n.s.)。だが、実は2世・3世では視聴そのものがない割合が高く、それに対して1世では視聴もでき、しかも「よく見る」という回答者が半数を占める。

(4) 日本のビデオの視聴についても世代差は認められないが ($\chi^2(2) = 1.234$, n.s.)、どの世代でも「ときどき見る」の回答が最も多く、「ほとんど見ない」「まったく見ない」がこれに続く。

(5) ブラジルのテレビ番組の視聴では世代差が認められるが ($\chi^2(2) = 40.962$, $p < .01$)、多重比較の結果、世代差は、ブラジルのテレビ番組を「ほとんど見ない」または「まったく見ない」1世と、「よく見る」2世・3世の間には認められたが、2世と3世の間には認められなかった。

(6) ブラジルの日系テレビ番組の視聴については、どの世代でも「まったく見ない」の回答がほとんどを占め、世代差はない ($\chi^2(2) = 3.530$, n.s.)。

(7) NHK 短波ラジオ・日系ラジオの聴取については5%水準で世代差が認められたが ($\chi^2(2) = 11.268$, $p < .05$)、多重比較の結果、「まったく聞かない」3世と1世との間に有意差があるものの ($p < .05$)、1世と2世、2世と3世の間には認められなかった。どの世代でも「まったく聞かない」という回答が多いが、1世では「よく聞く」が4人、「ときどき聞く」が2人見られた。

(8) 日本語の新聞購読については世代差が認められなかった ($\chi^2(2) = 0.390$, n.s.) が、そもそも2世・3世では日本語の新聞を購読しておらず、日本語の新聞を「よく読む」1世とは対照的な結果となっている。

(9) ポルトガル語の新聞購読については世代差が認められたが ($\chi^2(2) = 17.884$, $p < .01$)、多重比較の結果、「まったく読まない」1世と「よく読む」2世・3世の間には有意差が認められ ($p < .01$)、2世と3世の間には有意差はなかった。

(10) 日本の歌を聞くかどうかについては世代差は認められず ($\chi^2(2) = 3.142$, n.s.)、どの世代でも「よく聞く」「ときどき聞く」の回答者が比較的多い。

(11) カラオケに行くかどうかについても世代差は認められず ($\chi^2(2) = 1.588$, n.s.)、どの世代でも「まったく行かない」がもっとも多かった。

以上をまとめると、メディア・娯楽における言語使用で顕著な世代差が認められたのは「テレビ・ラジオの視聴」と「新聞の購読」で、日本・日本語志向の1世と、ブラジル・ポルトガル語志向の2世・3世との間で明らかな違いが見られた。

4.4 地域社会・職場における言語使用

地域社会・職場での言語使用については、次の4つの質問項目を設定し、選択肢（日本語のみ・日本語のほうが多い・日本語とポルトガル語が半々・ポルトガル語のほうが多い・ポルトガル語のみ）の中から選んでもらった。

- (1) 地域の日系団体 (2) 宗教団体 (3) 日系人の友人 (4) 職場

4.4.1 地域の日系団体における言語使用

まず、地域の日系団体の集まりや会合への参加について尋ねたところ、どの世代でも参加率は高く、1世61.0% (25人)、2世78.0% (32人)、3世78.6% (22人)である⁽⁴⁾。参加団体としては「文化協会・自治会・村会」が最も多いが、1世ではそのほか、俳句やカラオケなど趣味の会も比較的多く、2世では婦人会、3世では青年会・婦人会参加者が多かった。

こうした地域の日系団体における言語使用について、どの世代でも参加者の多い文化協会・自治会・村会での結果を示すと表13のようになる(算出方法は表6と同じ)。表13より、日本語中心の1世からポルトガル語中心の3世へと世代的に推移し

表13：文協など参加者の言語使用(人)

	日本語	半々	ポルトガル語	合計
1世	14	2	0	16
2世	10	5	3	18
3世	2	1	6	9
合計	26	8	9	43

ていることが分かる。このほか、参加者の比較的多い婦人会でも同様な傾向が認められるが、青年会では日本語使用の割合が少ない。これは青年会参加者のほとんどが3世であるため、言語使用もポルトガル語中心にシフトしていることによる。

4.4.2 宗教団体における言語使用

宗教帰属については前述(4.1.8)の通りだが、宗教の集会や活動への参加について尋ねたところ、どの世代でも参加率は悪く、1世26.8% (11人)、2世39.0% (16人)、3世28.6% (8人)であった。「参加する」と答えたインフォーマントに宗教団体での言語使用を尋ねた結果、1世では宗教を問わず全員日本語と答えたが、2世においては「仏教」「プロテスタント」では日本語、「カトリック」では日本語とポルトガル語が半々、3世ではポルトガル語の使用が多かった。なお、「カトリック」「仏教」の両方の宗教団体に参加すると答えた2世のインフォーマントの一人は、「カトリック」ではポルトガル語、「仏教」では日本語を使用すると答えている。

4.4.3 日系人の友人との言語使用

まず、友達の中に日系人が多いかどうか、選択肢(ほとんど日系人・日系人のほうが多い・日系人と非日系人が半々・非日系人のほうが多い・ほとんど非日系人)の中から選んでもらった。結果を表14に示す。1世では友人の

表14：日系人の友人の有無(人)

	ほとんど日系	日系が多い	半々	非日系が多い	ほとんど非日系	NR	合計
1世	31	6	2	1	0	1	41
2世	25	8	6	2	0	0	41
3世	9	6	7	6	0	0	28
合計	65	20	15	9	0	1	110

NR=無回答

ほとんどが日系人であるのに対し、2世、3世では漸次日系人の占める割合が減っていくことが分かる。だが、3世であっても、その半数以上が「日系人の友人のほうが多い」と答えているこ

とは注目される。

次に日系人の友人との言語使用の結果を表 15 に示す（算出方法は表 6 と同じ）。どの世代でも友人の数では圧倒的に日系人が多いにもかかわらず、そこでの言語使用は日本語中心の 1 世から、日本語・ポルトガル語併用の 2 世を経て、ポルトガル語中心の 3 世へと移行しており、世代的推移は非常に顕著であることが分かる。言語使用の割合が世代によって異なるかどうかカイ 2 乗検定を行った結果、有意差が認められた ($\chi^2(4) = 69.165, p < .01$)。

表 15: 日系人の友人との言語使用 (人)

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	36	4	0	1	41
2世	16	9	16	0	41
3世	0	2	26	0	28
合計	52	15	42	1	110

NR=無回答

4.4.4 職場における言語使用

職業については前述 (4.1.6) の通りであるが、職場で日本語あるいはポルトガル語を話すかどうか尋ねた結果を世代別に表 16、17 に示す。退職者や無職の人がいるため無回答が若干多いが、職場での日本語使用については、「話す」が多い 1 世から両者半々の 2 世、そして日本語を「話さない」3 世へという世代的推移を見ることができる。一方、職場でのポルトガル語使用においては、「話さない」の回答も割と多い 1 世に対し、2 世・3 世では「話す」を回答した割合が圧倒的に多い。各言語使用の割合が世代によって異なるかどうかカイ 2 乗検定を行った結果、日本語 ($\chi^2(2) = 17.360, p < .01$)、ポルトガル語 ($\chi^2(2) = 17.184, p < .01$) とともに有意差が認められた。

表 16: 職場での日本語使用 (人)

	話す	話さない	NR	合計
1世	31	7	3	41
2世	17	19	5	41
3世	7	16	5	28
合計	55	42	13	110

NR=無回答

表 17: 職場でのポルトガル語使用 (人)

	話す	話さない	NR	合計
1世	20	15	6	41
2世	32	4	5	41
3世	19	0	9	28
合計	71	19	20	110

NR=無回答

以上をまとめると、地域社会・職場における言語使用においてはいずれも、日本語中心の 1 世から、日本語・ポルトガル語併用の 2 世へ、そしてポルトガル語中心の 3 世へという世代的推移を見ることができる。また、両言語併用の 2 世においては、よりブラジルのサブドメイン（カトリック教会の集まり、職場でのポルトガル語使用）でポルトガル語の使用が増える傾向にある。

5. まとめと今後の課題

以上、奥地農村日系コミュニティであるアリアンサ移住地における言語シフトについて、ブラジル日系人の属性に見られる世代差を踏まえつつ、ドメイン別言語使用の実態を世代的推移という観点から述べてきた。アリアンサ移住地建設から 80 年たった現在、コミュニティメンバーの中心は 2 世・3 世に変わり、そこでの生活言語はドメインごとに違いはあるというものの、日本語からポルトガル語へ交替してきており、ポルトガル語への言語シフトは 3 世世代ではほぼ完了していると言えることができる。

そして、コミュニティ全体から見れば、日本・日本語的側面とブラジル・ポルトガル語的側面が混在する状況であるわけだが、そこには世代間の違いが顕著に見られ、大まかに言えば、日本的・日本語中心の1世とブラジルのポルトガル語中心の3世は対照的な関係にあり、その中間に位置する2世は日本的かつブラジルのであり、言語使用においては日本語・ポルトガル語を併用する傾向が強いと言えるだろう。さらに、この中間世代である2世では各ドメインにおいて、より日本的なサブドメイン（例えば、家庭内における親世代との言語使用や、仏教・プロテスタントの宗教団体での言語使用）では日本語を、よりブラジルのサブドメイン（例えば、家庭内における子供・孫世代との言語使用や、ブラジルのテレビ番組の視聴・ポルトガル語新聞の購読）ではポルトガル語をより多く選択する傾向があることも明らかになった。

今後の課題としては、まず、言語使用・言語選択の個人的差異とそれを生じさせる要因についての分析が挙げられる。日本語とポルトガル語との言語選択に「世代」による違いが大きいことは明らかになったが、同一世代の中で見られる個人的な違いは何に起因するのか—おそらくは単一的ではなく複合的に諸要因がかかわりあっていると思われるが—についても考える必要がある。また、今回の分析ではドメインごとの世代的推移は明らかにできたが、ドメイン間の相互関係については言及できなかった。こうしたミクロレベルでの分析とともに、マクロレベルにおいて言語シフトが起こるさまざまな諸要因—日系コミュニティの歴史的・文化的背景や社会的地位・役割など—の解明も必要であろう。

冒頭でも述べたが、今回の言語生活調査は近郊農村地域であるスザノ市福博村でも行っている。アリアンサ移住地とスザノ市福博村は同じ農村地域ではあるが、前者は奥地農村、後者は近郊農村であり、地理的・社会的・歴史的背景を異にしているため、両地域における共通点・相違点を明らかにすることは興味深い課題である。また、同じ日系コミュニティであっても農村部と都市部とで大きな違いがあることは、従来から指摘されていることであり（ブラジル日系人実態調査委員会・鈴木梯一編 1964、サンパウロ人文科学研究所 1989、2002、Adachi 2001）、将来的には都市部での調査を行うことも念頭に入れ、より詳細なかつ包括的視点からブラジル日系社会の実像に迫っていきたい。

付記 本稿は大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」言語の接触と混交研究班「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」（事業推進者：工藤真由美大阪大学大学院文学研究科教授）による研究成果の一部である。

注

- (1) サンパウロ人文科学研究所（1989）によると、1987年の日系総人口は122万8000人と推定され、そのうち72.23%がサンパウロ州内（このうち約40%はサンパウロ市およびサンパウロ大都市圏内）に集中している。
- (2) 河野（2000）によると、「出稼ぎ」は“dekassegui”として日本で発行されているポルトガル語新聞によく使用される定着度の高い借用語—イタリック体や引用符などの使用がなく、表記面でポルトガル語の影響を受けている。複数標識の-sがつく—であり、ブラジルの新聞・雑誌でも用いられるようになったという。
- (3) 法務省入国管理局（<http://www.moj.go.jp/>）の外国人登録者統計によると、2004（平成16）年末現在、ブラジル国籍を

- 持つ外国人登録者数は 286,557 人。この数値は外国人登録者総数の 14.5% を占め、朝鮮・韓国人、中国人に次いで多く、年々増加しているという。なお、ブラジル日系人における出稼ぎの特徴と推移については森 (1995) が詳しい。
- (4) 『ニッケイ新聞 (Jornal do Nikkey)』 (<http://www.nikkeishimbun.com.br/>) 2004 年 6 月 18 日付記事。
- (5) ブラジル日系社会における言語研究については山東 (2003)、中東・MELO (2003) を参照されたい。
- (6) この調査は、立地条件が異なる複数の日系地域コミュニティの実態調査を行い、日系人口の特徴、日系の個人や世帯の生活状況、地域社会が抱える問題、日系人の文化やアイデンティティに関してデータを収集し、同時に日系人個人や日系社会が抱えるさまざまな問題をコミュニティレベルで詳細に把握、地域間で比較し、問題解決のための基礎データを提示することを目的に行われたものである。同調査が対象としたのは、特に日系人口が集中するサンパウロ州を中心とする南東部やパラナ州を中心とする南部に散在する日系地域集団地である。
- (7) アリアンサ移住地については『ありあき通信』 (<http://www.100nen.com.br/ja/aliansa/>)、弓場農場については“Comunidade YUBA” (<http://www.100nen.com.br/ja/yuba/>) も参照されたい。
- (8) 15 歳未満も合わせた全体では、1 世：103 人 (16.0%)、2 世：301 人 (46.7%)、3 世以降：230 人 (35.7%)、非日系：10 人 (1.6%)、合計 644 人となる (サンパウロ人文科学研究所 2002)。
- (9) 世代の算定方式には「日本政府方式」と「コロニア方式」とがある。両者は上位世代＝親の世代帰属を基準とする点で共通するが、前者では、1 世と 2 世の親から生まれた子は「2 世」と計算するのにに対し、後者では「3 世」と計算する。つまり、日本政府方式では、[親の世代帰属の少ない方 + 1]、コロニア方式では [親の世代帰属の多い方 + 1] で子供の世代が決まる。なお、従来、コロニア方式が日系社会で広く使われているが、近年のデカセギ現象の広がりにより日本政府方式も市民権を獲得しつつある。
- (10) 中部出身者 15 人のうち、長野県：7 人、富山県：5 人であった。これは、これらの県がアリアンサ移住地建設において深く関わっていることと関係していよう。
- (11) 2 世・3 世に見られる異民族結婚の比率は、サンパウロ人文科学研究所 (1989) による全国調査の結果 (平均 45.9%) と比べると格段に低い。これには今回の調査地点が、奥地農村地域の日系集団地であることが関係していよう。このような偏向性については、サンパウロ人文科学研究所 (2002) にも指摘がある。
- (12) 水野 (2005) によれば、ブラジル地理統計院 (IBGE) の 2000 年人口センサスの結果、近年、ブラジルにおいて宗教が多様化しており、伝統的に農村地帯を基盤としてきたカトリックは都市化の進展とともに信者が減少し、プロテスタント信者が増加しているという。こうしたキリスト教の勢力変化に加え、複数の宗教を信仰する人口と無宗教者の増加も近年顕著になってきている (ブラジル日本商工会議所編 2005)。なお、アリアンサ移住地でプロテスタントの割合が比較的高いのは、移住地建設にプロテスタント系の力行会が深く関与したことと関係がある (サンパウロ人文科学研究所 2002)。
- (13) サンパウロ人文科学研究所 (1989) によると、家庭内の使用言語について、1958 年に行われた全国調査 (ブラジル日系人実態調査委員会・鈴木健一編 1964) の結果と比較すると、1958 年当時農村部・市街地のいずれにおいても日本語が優勢だったが、1987 年調査ではポルトガル語が優勢になり、家庭における日本語とポルトガル語の使用の割合はこの 30 年の間で完全に逆転してしまったという。
- (14) この数値は、サンパウロ人文科学研究所 (1989) による全国調査の結果 (日系団体加入率：都市部 25.4%、農村部 50.8%) をかなり上回るものである。これも地域的な偏向性 (注 11 参照) によるものであろう。

参考文献

- Adachi, Nobuko (2001) Japanese Brazilians: the Japanese Language Communities in Brazil. *Studies in the Linguistic Sciences* 31 (1), 161-178.
- Baker, Cdin (2003) *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. 3rd edn. Clevedon: Multilingual Matters Ltd.
- Fishman, Joshua A. (1965) Who Speaks What Language to Whom and When? *La Linguistique* 2, 67-88. (reprinted in Wei, Li (ed.) (2000) *The Bilingualism Reader*. London: Routledge, 90-106.)
- Fishman, Joshua A. (1967) Bilingualism with and without Diglossia; Diglossia with and without Bilingualism. *Journal of Social Issues* 23 (2), 29-38. (reprinted in Wei, Li (ed.) (2000) *The Bilingualism Reader*. London: Routledge, 81-88.)
- Fishman, Joshua A. (1972) Domains and the Relationship between Micro- and Macrosociolinguistics. Gumperz, J. & Hymes, D. (ed.) *Directions in Sociolinguistics*. Oxford: Basil Blackwell Ltd., 435-453.
- Kanazawa, Hiroki and Loveday, Leo (1988) The Japanese Immigrant Community in Brazil: Language Contact and Shift. *Journal of Multilingual and Multicultural Development* 9:5, 423-435.
- Weinreich, Uriel (1963) *Language in Contact: Findings and Problems*. The Hague: Mouton.
- キクムラ=ヤノ、アケミ編 (2002) 『アメリカ大陸日系人百科事典』明石書店
- 工藤真由美編著 (2003) 『第 1 部 ブラジル日系社会と日本語』『大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 2002・2003 年度報告書第 5 巻：言語の接触と混交—日系ブラジル人の言語の諸相』：9-106.
- 工藤真由美編著 (2004) 『ブラジル日系社会言語調査報告』『大阪大学大学院文学研究科紀要』44—2
- 河野 彰 (2000) 『在日ブラジル人のポルトガル語に見る日本語からの借用語』国立国語研究所編『日本語と外国語との対照研究Ⅷ 日本語とポルトガル語 (2) —ブラジル人と日本人との接触場面—』くろしお出版：53-92.

- 山本 功 (2003) 「ブラジル日系人の日本語への視点」『女子大文学 国文篇』54 : 36-54.
- サンパウロ人文科学研究所 (1989) 『ブラジルに於ける日系人口調査報告書— 1987・1988 —』サンパウロ人文科学研究所
- サンパウロ人文科学研究所 (2002) 『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所
- 統計数理研究所 (1993) 『研究リポート74 ブラジル日系人の意識調査— 1991～1992 —』統計数理研究所
- 永田高志 (1991) 「ブラジル日系人の言語生活—アサイ日系社会を例に—」『移住研究』32 : 61-91.
- 中東靖恵・MELO, Leonardo A. de P. (2003) 「ブラジル日系社会における言語の総合的研究へ向けて (1)」『岡山大学文学部 紀要』39 : 67-82.
- 野元菊雄 (1969) 「ブラジルの日本語」『言語生活』219 : 67-75.
- 半田知雄 (1980) 「ブラジル日系社会における日本語の問題 (二)」『言語生活』347 : 58-65.
- ブラジル日系人実態調査委員会・鈴木梯一編 (1964) 『ブラジルの日本移民 記述篇』東京大学出版会
- ブラジル日本商工会議所編 (2005) 『現代ブラジル事典』新評論
- 本堂 寛 (1983) 「ブラジル日系人の言語—異言語の中の日本語使用について—」『現代方言学の課題』1, 明治書院 : 221-244.
- 馬瀬良雄 (1986) 「ブラジル便り—ブラジル日系人の日本語」『言語生活』418 : 36-45.
- 水野 一 (2005) 「多様化するブラジルの宗教」『ブラジル特報』2005年1月号, 日本ブラジル中央協会
- 森 幸一 (1995) 「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇『就労と生活』』(15章) 明石書店 : 491-546.
- 森 幸一 (2003a) 「ブラジル日系社会の成立—日本移民小史—」工藤真由美編著『大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書第5巻 : 言語の接触と混交—日系ブラジル人の言語の諸相』 : 16-19.
- 森 幸一 (2003b) 「日系社会調査と言語生活」工藤真由美編著『大阪大学 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文科学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書第5巻 : 言語の接触と混交—日系ブラジル人の言語の諸相』 : 34-51.
- 山内陸男編 (1986) 『概説ブラジル史』有斐閣

(なかとう・やすえ 文学部助教授)